

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Omega-3 fatty acid intake during pregnancy and risk of infant maltreatment: a nationwide birth cohort – the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊娠中のオメガ 3 系脂肪酸摂取量と産後の母親による不適切養育行動との関連: エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 富山ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Psychological Medicine

年: 2021 DOI: 10.1017/S0033291721002427

筆頭著者名: 松村 健太

所属 UC 名: 富山ユニットセンター

目的:

オメガ 3 系脂肪酸には暴力的・攻撃的行動を抑制する効果だけでなく、動物では母獣の養育行動を促進する効果があると知られている。しかし、妊婦のオメガ 3 系脂肪酸の摂取量と、産後の母親による不適切養育行動(虐待やネグレクトになりかねない行動)との関連については知られておらず、本研究ではこの関連について調べた。

方法:

エコチル調査に参加した 92,191 人の妊婦を対象とした。妊娠中期及び妊娠末期に食物摂取頻度調査票(FFQ)で測定した総エネルギー調整済みオメガ 3 系脂肪酸摂取量と、生後 1・6 ヶ月における不適切養育行動(叩く、激しく揺さぶる、家に一人で放置する)との関連を検討した。産後の母親の養育行動は、それぞれ 4 段階の回答のうち“全くない”以外を“不適切養育行動”と定義した。潜在的交絡因子は、16 変数を選択した。

結果:

オメガ 3 系脂肪酸摂取量に基づき妊婦を 5 群に分けたところ、最も摂取している群における“叩く(1 ヶ月時点)”の不適切養育行動は、最も摂取していない群と比較して約 27%減少していた。また、この不適切養育行動の発生率は、オメガ 3 系脂肪酸摂取量の増加と共に減少する傾向が認められた。“激しく揺さぶる(6 ヶ月時点)”でも同様の減少が認められ、最も食べている群で約 21%減少していた。さらに、“家に一人で放置する(1 ヶ月時点)”でも同じ傾向が認められ、最も食べている群で約 13%減少していた。

考察(研究の限界を含める):

本研究の結果より、妊娠中期及び妊娠末期におけるオメガ 3 系脂肪酸摂取量は、叩く、揺さぶる、家に一人で放置する、の各項目における不適切養育行動の減少と関連しており、これらの間に、用量依存的な関係があることが明らかとなった。以上より、妊娠中期及び妊娠末期におけるオメガ 3 系脂肪酸摂取量の増加は、産後の母親の不適切養育行動のリスクの減少と関連していると結論づけられた。本研究の主な限界点としては、観察研究であるため因果関係を結論づけるまでには到っていないこと、不適切養育行動の測定を質問票への母親の自己回答から得ていること、生後 6 ヶ月までしか追跡していないこと等である。

結論:

本研究より、妊娠中期及び妊娠末期におけるオメガ 3 系脂肪酸摂取量の増加は、母親による生まれた子どもへの不適切養育行動のリスク減少と関連していることが明らかになった。妊娠中におけるオメガ 3 系脂肪酸の摂取は、出産後の不適切養育行動の減少に効果的である可能性が示唆された。